



中30回関西旅行 伊勢神宮内宮 宇治橋前 (戦後、GHQの検閲に備えたのか、後方の鳥居が切り取られている)



## 土浦中学校の修学旅行 7 中学30回生の関西旅行1

1916 [大正5] 年度から始まった関西旅行は、1942 [昭和17] 年度まで続けられ、土中生たちが4年余りの間、一日千秋の思いで待ち焦がれる学校行事となっていました。今号から、1930 [昭和5] 年度に実施された、中30回生の関西旅行記を繙いていきます。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。  
なお、引用文中の【】は筆者による注記です。

はじめに

1930 年度の中30回生の関西旅行については、同年9月発行『修進第32号』に詳

細な『関西旅行記』が載せられています。

「第一日」・「第二日」を久保田晴次、「第三日」を国友秀勝、「第四日」を中村貞之助、

「第五日」を太田惣一、「第六日」を橋爪信常、「第七日」・「第八日」を宮本信三(全員中30回)が、それぞれ担当しています。

この『関西旅行記』について、中30回松井喜一郎は、1981 「昭和56」年発行『中三十回卒業五十周年記念誌』「旅行記余聞」の中で次のように述べています。

『修進第三十二号(昭五刊)』の『関西旅行記』は、出発前に指名された筆者達による公式記録である。執筆者は級長クラス、文芸部員、修進会幹事等の中から選ばれたエリートである。さすがにうまいものである。読み返しているうちに思わず感嘆の溜息をもらすほどである。正確な見聞の記録、そして豊富な語彙と美麗な文章、とかく概念文になつたり、美辞麗句の羅列に終わつたりしがちな当時の作文の傾向と違つて、具体的であり説得力がある。……。

さて、『関西旅行記』の末尾は、『四年間、一日千秋の思ひして待ちに待つた我等が旅行は恙なく終へたのである。』と結んであるが、果たして恙なく何事もなく終わつたのであろうか。

いろんなことがあつたのを一番よく知つているのは、他ならぬわれわれ参加者一同である。

その裏話をまとめるようにと勧められたので、それらの一端をメモ風に綴つてみよう。

前掲の旅行記が正史ならば、以下はそこには書けなかつた隠れた事実を記す外史ともいふべきもので、正史が主として昼の部の見聞記であるのに対し、夜の部のあの事、この事である。……。

今号から、松井が賞賛する『関西旅行記』をそのまま掲載し、『旅行記余聞』を一部加えて、中30回生の旅行の顛末を記していきます。

士山も見ることが出来ないのが残念。然しきらめた。もうぐうぐうやつてゐる者もある。口をあんぐりと開いて寝てゐる者もある。あまりねむいので横になつた。

後は白河夜舟で何も知らない。

## 関西旅行記

第一回(6月1日) 5年久保田晴次

「六月一日、土浦発午後七時八分、平塚【美治】体育、遠藤【川又】勇三郎【理科】、坂入【要之介】数学、片岡【保国】語】四先生引率の下に我等一行八十八名の土中健児は関西旅行のスタートを切つた。

誰の顔も皆喜びと愉快なる様子が現はれて居る。やがて列車は懐しい水郷土浦町を後にして長いくレールをぐんぐんと呑んで行く。荒川沖を越えて牛久を過ぎた。もうすつかりあたりは暮く暮くなつた。窓外には村落の電燈がちらちら見えるだけ、多分取手の手前だつたらう。数百のランプが田一面に整然として灯されてあつたのを見た。話によると害虫駆除のための誘蛾燈であつたさうだ。

間もなく上野駅に着く。省線【現山手線】に乗換東京駅に向つた。午後十時二十分東京駅を後にして再び列車は走り出した。新橋、品川、大森、横浜、程ヶ谷【保土ヶ谷】、戸塚等の暗い都市が後に退く。

車中は校歌を合唱するやらトランプ遊びをするやらで仲々騒がしい。其の騒音に混つて『かうづ【国府津】』『かうづ』

と呼ぶ駅夫の声が聞える。もうすつかり東海道の感じがする。而し、あたりは真暗であるから見ることも出来ない。やがて三島【注】を通過した頃皆静かになる。富士山も見ることが出来ないのが残念。然しきらめた。もうぐうぐうやつてゐる者もある。口をあんぐりと開いて寝てゐる者もある。あまりねむいので横になつた。

泰平の夢をむさぼつてゐる間に列車はどんどん走る。ぱつと眼を開いた時は丁度天龍川の鉄橋【注】を渡つて居つた。鉄橋は三千九百六十七尺あつて東海道第一回【注】が御殿場線として開通した。昭和9年12月31日丹那トンネル開通に伴い、国府津II・御殿場II・沼津II間が御殿場線として分離された。東海道本線のルート変更と同時に三島駅【注】が開業したため、初代三島駅は下土狩駅に駅名を変更した。

【注】三島 殿場線が東海道本線の一部であつた「明治31年6月に、三島駅として開通。昭和9年12月31日丹那トンネル開通に伴い、国府津II・御殿場II・沼津II間が御殿場線として分離された。東海道本線のルート変更と同時に三島駅【注】が開業したため、初代三島駅は下土狩駅に駅名を変更した。

天龍川に架かる東海道本線の橋で、現在使用されてゐる下り線は「大正2年」に、上り線は「昭和56年」に完成したもの。初代天龍川橋梁は「明治20年」に完成したが、翌年11月に完成してしまつた。初代天龍川橋梁の横に橋が架けられ、8月に開通した。全長1,208.83m。現存する前の鉄道橋梁の中では最長のトラス橋。1981年に完成して解体撤去され、新しいトラス橋に付け替えられました。

「浜松駅を過ぎた頃小雨が降り出た。雨だ。天我等に幸あらんことを祈る。

## 関西旅行記

第二回(6月2日) 5年久保田晴次

誰やら素敵くと叫ぶ。今浜名湖畔を走つてゐるのだ。満々と湛えた水。散在してゐる島、全く一幅の画だ。未だ小雨はちらくしてゐる。少からず落胆した。やがて名古屋も過ぎた。車中には其処此處に『さうでおますかへ』なんていふ声が聞える。もうすつかり関西氣分になつてしまふ。昨晩の眠りが足りないせいか、何時の間にかうとくして居る間に【国鉄参宮線】山田駅【現JR伊勢市駅】に着いた。時は午前十一時四十分。我等の目的地の第一歩が印せられたわけである。宇治山田市は御鎮座以来神領の旧都にして、国民崇敬の中心、一ヶ年の参拝者約二百万、市は人口四万四千、官署学校多く、所謂我が国の聖地である。これから我等の崇敬し居る、皇祖の御先祖でお在します【おはします】伊勢の大廟を拝するのであるかと思へば何となくある異様な感じが胸にせまつてくる。駅前の松島旅館で昼食を済ました。その美味しいことと言つたら旅行ならではとても得られぬ味だつた。此處で少し休憩、その間に南朝の忠臣結城宗広<sup>(注3)</sup>の墓に参拝した。やがて一同徒步にて外宮に参拝した。此の宮は一名、度会の宮とも称し奉り、豊受大神を祀り、高倉山に鎮座し給ふ。苑内表参道の側に日清、日露の両役の記念砲があつたのに気がついた。再び一同電車<sup>(注4)</sup>に乗り内宮に向つた。途中倉田山に下車して徳古館農業館を見学す。徳古館は煉瓦及び花崗石造、ルネーサン式の建築にして内部を十室に分ち、刀剣、絵画、彫刻、文書等、神宮一切の宝物を始め、我が国歴史文物の資料が沢山陳列されてあつた。又貴賓室には有栖川宮熾仁親王、同威仁親王の等身銅像を安置され

てあつた。目にうつる物皆珍しきものばかりであつた。農業館には農産、林産、水産、牧畜、養蚕等に関する我が国産業の沿革並に現状を概観するに足る材料が山の如く陳列されてあつた。

これから電車で内宮に行つた。内宮は宇治の神路山に鎮座したまひ、又は鈴の宮と称し奉り、御祭神は畏くも天祖天照大御神にまします。森林の中を段々と奥に進んで行くと清い流れがあつて、大きな橋が架してある。これ有名な宇治橋である。五十鈴川の流れは清く神々しい。この橋を渡れば一点の塵埃もなく綺麗に掃き清められた神苑である。五十鈴川の流れで手を洗ひ、口を清めれば、自ら心も体も清らかになる。幾百年経つたかわからぬ杉檜が素性よくすらりとした幹を見せて立つてゐる。



## 二見ヶ浦 紅葉屋旅館

その間を一步々々と踏みしめれば自然と歩調もとれ、身体は何かで縛られて居るかの如く固くなる。一の鳥居を過ぎ二の鳥居をくぐつて神垣の外に立つて

久保田は、最後に「そして紅葉屋旅館にその日の安住を求めた。」と記していますが、一部の生徒たちにとつては「安住」ではなかつたようで、松井は、その騒動を次のように書いています。

「……この夜の泊まりは一見ケ浦の紅葉館。ここで宇都宮農林【宇都宮高等農林学校 現宇都宮大学農学部】の生徒との間で大喧嘩があつた。何でも女学生の問題から端を発して双方の出入りとなり、一時はわれわれの宿に押しかけられ、屋根伝いの格闘となり、そのさまは、まるで京都撮影所のロケでもやつてゐるような光景であつた。『男の喧嘩はこうやるんだッ』とペイさん【坂入要之介先生】数学の先生なので渾名はペさん】に教えられて、巻き返しにはるばる相手方の宿舎である宇治山田市の山田屋旅館へ押し

（注4） 合同電気神都線。「昭和19」年から三重交通  
神都線となる。神都線は、三重県伊勢市（旧：宇治山田市、伊勢市）にあった軌道線路、面点車（じてんしゃ）である。山田駅（現JR伊勢市駅）前を起点とし、内宮までと二見までとの路線が、1961年に廃線となつた。市内間相互輸送（ほか、国鉄伊勢市駅、近畿日本鉄道宇治山田駅、近畿日本鉄道守山駅、伊勢神宮、二見ヶ浦へ向かう観光参拝客輸送の役割も果たした）といった伊勢市のターミナル駅から、伊勢市駅へ向かう観光参拝客輸送の役割も果たした。中島武は、「昭和10年」2月1日付「進修第33号」で、「この電車を『常南電車の兄弟の如く小さい電車に押ししめて、と記しているが、定員44名の常南電車（本紙第162号で既述）と同様では、土中生一行だけでも鮓詰めになつて、いたことであろう。」と記述する。

<sup>(6)</sup> 鎌倉後期・南北朝時代の武将。新田義貞に従って鎌倉幕府を攻略、義良親王（のりよしのぶ）のう後の後村上天皇を奉じて陸奥国白河庄（福島県白河市）に拠り、のち足利尊氏の討伐に転戦、途<sup>1338</sup>「延元3年、伊勢に病死した。

恭【「恭」の誤植】しく拝した時、尊さ有難さ、を沁々と感じ頭は独りでに下る。去るに当つて私は再び神拝して天地のある限り、この聖地にお在しまして皇室の御繁栄と日出る国を永遠に輝かされんことをお祈りしました。何とも言はれない気分で神苑を出て記念撮影をして再び電車にて二見が浦に行つた。そして紅葉屋旅館にその日の安住を求めた。

松井は、久保田の筆を「久保田晴次君の伊勢神宮参拝の記の素晴らしさ」と評しています。確かに、この旅行の第一の目的地である伊勢神宮の荘厳さと参拝の感激とをよく伝えていました。また、この旅行では皇室関係の聖地巡拝とともに

かけることになる。主謀者は宮本信三君。同道の面々は、池田敏雄、山本美晴、神林登、宇佐見春雄、渥美福三、河野芳明君らの兵（つわもの）たち。めいめいが木刀持参で殴り込んだので、ピストン堀口（注5）を生んだほどの名門？の相手も怖れて出てこられないところでひとまずは収まつた。……」

喧嘩の仕方を教える先生も先生ですが、わざわざ電車に乗つて、木刀持参で殴り込みを掛ける生徒も生徒です。警察署のある宇治山田の町中（まちなか）で乱闘騒ぎになつていたら、警察署に泊められるだけでは済まなかつたことでし

かけることになる。主謀者は宮本信三君。同道の面々は、池田敏雄、山本美晴、神林登、宇佐見春雄、渥美福三、河野芳明君らの兵（つわもの）たち。めいめいが木刀持参で殴り込んだので、ピストン堀口<sup>(注5)</sup>を生んだほどの名門？の相手も怖れて出てこられないところでひとまずは収まつた。……。」

喧嘩の仕方を教える先生も先生ですが、わざわざ電車に乗つて、木刀持参で殴り込みを掛ける生徒も生徒です。警察署のある宇治山田の町中（まちなか）で乱闘騒ぎになつていたら、警察署に泊められるだけでは済まなかつたことでしょう。

（注4）電車 合同電気神都線。<sup>1944</sup>「昭和19」年から三重交通神都線となる。神都線は、三重県伊勢市（旧：宇治山田市、通称：神都）にあつた軌道線（路面電車）である。山田駅（現JR伊勢市駅）前を起点とし、内宮までと二見までとの路線があつたが、<sup>1961</sup>「昭和36」年に廃線となつた。市内間相互輸送の<sup>1961</sup>「ほか、国鉄伊勢市駅、近畿日本鉄道宇治山田駅見ヶ浦へ向かう観光参拝客輸送の役割も果たして、いた。中<sup>34</sup>回中島武は、<sup>1935</sup>「昭和10年」2月発行『進修第38号』「関西紀行』で、この電車を「常南電車の兄弟の如く小さい電車に押ししめられて」と記しているが、定員44名の常南電車（本紙第162号）と同様では、土中生一行だけでも鮎詰めになつていたことであろう。

（注5）ピストン堀口 1914「大正3」年、栃木県真岡市生まれ。昭和初期における日本ボクシング界の象徴的存在で、「拳聖」と呼ばれた。本名堀口恒男。